

結婚を機に移住した寡婦の高齢女性が住み続ける理由
—富山県氷見市中波を事例に—

人文地理学研究室 田中杏佳

1. はじめに

1950年代後半 大型計算機の普及
実証主義に偏った計量地理学が隆盛



1970年代 人文主義地理学が台頭
場所と人のかかわりを重視

西洋を中心に場所愛の研究が盛んになった

2. 先行研究①

・場所愛をテーマにした研究①

Tuan(1974)

・人と場所との間の情緒的な結びつきをトポフォリアという概念を用いて説明した

Relph(1976)

・場所に対して人が感じる一体化の度合いを外部性(outsideness)と内部性(insideness)で表す

Rowles(1980)

・アパラチアの高齢者が場所愛着によって住み続けることを明らかにした
場所への愛着を①身体的内部性②社会的内部性③自伝的内部性に分類

→欧米での動きを受け、日本でも場所愛研究は盛んに行われた

2. 先行研究②

・場所愛をテーマとした研究②

田原・神谷(2002)

・Rowlesの内部性の概念によって、場所への愛着と住み続けを説明した

石盛(2004)

・地域愛着が居住継続意思が高い傾向を明らかにした

野邊(2016)

・高齢女性は地域に愛着を持つことで住み続けの要因となっている



住み続けの要因として場所愛から説明している

2. 先行研究②

場所愛

・個人が場所に対してもつ愛のことを指している

つまり、個人主義的な概念であるといえる

→西洋諸国は個人主義、東洋諸国は集団主義といわれる

=場所愛は西洋の個人主義的な考えである

西洋の概念の枠組みをそのまま取り入れてもいいのだろうか

→住み続けの要因として東洋の概念で考えられる要因はないだろうか

2. 先行研究③

・場所愛以外の住み続けの要因

野邊(2016)

・高齢女性が家屋、田畑、墓といった家産を守るために住み続けていることを明らかにした

→「イ工」制度の考え方(東洋の考え)

住み続けの要因として東洋流の「イ工」制度が影響するのではないか

→日本における「イ工」の意識とはどのようなものが

2. 先行研究④

- 日本における「イエ」制度
- そもそも「イエ」制度とは
→長子に社会的地位・財産・祭祀を優先的に継承させる制度(森岡 1976)
この家制度を通じて永続的に「イエ」を継承していく

伝統的な「イエ」制度では
子どもうちの誰かが親と同居し、介護は妻か嫁が担当
血縁よりも「イエ」が重視されていた(木立 2004)
イエの拘束力が強い



個人がどう思おうがその場所に居続けなければいけない
= 住み続けの理由としてなりえる

3. 研究目的と方法

• 研究目的

- 西洋的概念である場所愛は、人を損得なしに継続的に定住させる
= ポジティブな意味での要因
- 東洋的慣習であるイエ意識は、拘束力が強く無理に定住させる
= ネガティブな意味での要因



日本など東洋では、ポジティブな要因とネガティブな要因が織り交ぜられた
争柄が、実際にその地域に住む人達を引き留めているのではないか
→この仮説を検証し、日本における住み続けの枠組みを明らかにすることを
目的とする

3. 研究目的と方法

• 研究方法

- ライフヒストリーによる分析(10月~1月)
- ライフヒストリーを対象者に語ってもらう
→対象者の語りをRowlesの内部性と照らし合わせ、住み続けの理由を検討
する

• 調査内容

- 基本的には生きてきた過程を語ってもらう
「近所」「地域」「社会関係」「介護」に関しては話がない場合、
追加で話を聞いた

3. 研究目的と方法

• 調査対象者

結婚を機に移住した寡婦の高齢女性 4名(A~D)

地元の住人よりも愛着がわきにくい
+
旦那が死んだことによりその地域に居続ける必要性がない
→義理の関係のみ残るのにその家にいる理由



イエ意識がはっきりとてやすい対象者

3. 研究目的と方法

• 調査対象者

表1 対象者の概要

年齢	世帯構成	出生	交友関係	介護	日常生活の支援	相談事
A	70代 一人	東京	B	老人ホーム	受けていない	娘(七高) 義妹(高岡)
B	70代 息子と二人	水尾	A	していない	同居している息子	A
C	60代 義母と二人	七高	精にない 愛着と結 す	ジョーとス ティのみ	受けていない	娘(七高)
D	80代 息子と二人	神戸	精にない	していない	同居している息子	娘(水尾)

(聞き取り調査より作成)

4. 調査対象地概要

• 富山県氷見市中波

人口 325人
(うち高齢者 156人)

- 結婚を機に移住した女性が多い
「旦那はん」と言われる名望家がある
「旦那はん」を持ち上げる風潮が根付く

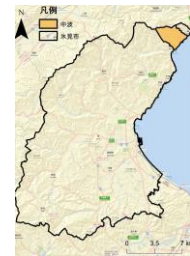


図1 中波の位置

5. 調査結果①

・場所愛着

- 「土地貧乏で、昔はあった青年団とか婦人会と老人会もなくなって団結力がない」(A)
 「中波は来た時から思っていたけどほんと団結力がない。上の人の言うことをすぐ聞いて私たちが意見してもなんも聞いてくれない」(B)
 「まとまりがないよね。本来世話をする人たちが世話をすることを嫌っているからまとまらないんやよね」(C)
 「中波は団結力がないね。最近は少しマシにはなっているけど」(D)

→愛着の定義には含め難い複雑な心情が多く吐露された

5. 調査結果②

・イ工意識

- 「旦那が他界したときに、元々いたところに戻るって考えはなかった。この家に来た時から結婚して家を守るっていうのは当たり前やと思ってたから。ほかの人もおんなじやと思う」(A)
 「私の代でこの家を満すことはわかっているんだけど、この家に来た時から嫁としてこの家を守っていくかと決めたから。長男と結婚した宿命」(C)
 「息子がこの家に住んでくれるから、家を受け継いでくれるのはうれしいけど、お嫁さん捕まえてこない不安だな」(B)
 「長男がひとまず家継いでくれるからひとまず安心」(D)

→義理の夫だけが、「イ工を守る」ために住み続ける人と「イ工を守れない不安」が話された

5. 調査結果③

・親族との同居の難しさ

- 「娘のところ行ったりはするけど、同居したいとは今は思わない。自分で動けるし、近くに〇〇(義妹)が住んでいるから不便ではないし。車のられなくなっても〇〇ちゃんのとこに話に行ったほうがいいわ」(A)
 「介護が終わったとしても同居はしなないと思う。娘を嫁に出してしまったから。不便にも感じんからここに住み続けたいな。どうなるかわからんけど、ここは好きじゃないけどこの人たちの面倒みるんは好きやからね」(C)

→中波で築いた社会関係に対する愛着の念がうかがえる

6. 考察

- ・地元民じゃないからこそ、一歩引いたまなざしで地域をとらえている
→「団結力がない」といった理由
- ・さらには、集落外から嫁入りした女性として、閉鎖的な集落に入る
→内向き志向の中波に対する違和感や嫌悪感

愛着があるから住み続けるという従来の研究と異なる結果となった

愛着があるわけでもない地域に住み続けている選択をとっているのは、イ工意識が深くかかっていることが明らかになった
→愛着というポジティブな要因とイ工というネガティブな要因が合わさった東洋独自の住み続けの理由

6. 考察

- ・場所愛の研究は、西洋で盛んに行われてきた研究である
日本でも西洋の研究を参考にし、場所愛の研究が多くされている
西洋と東洋の文化的背景を考えずに枠組みをそのまま取り入れた



東洋ならではの現象を見落とす可能性があると考えられる
→東洋の文化的背景を考え、カスタマイズすることが必要

7. おわりに

- ・場所愛着の希薄さやイ工意識の強さ
結婚を機に移住した女性のみには聞けなかった



中波地域に暮らす高齢者全体の意識なのか検討できなかった